

城陽生れの城陽育ち、明治 遠縁（とうえん）の伏見・河合 とでした。幸いにも年を追って 神戸外国商館の需要もあり、人の私には、寺田李（すもも） 喜八氏方に名も知らん果樹があ 沢山に実り、色味共に良好で、ジャム、ゼリーの材料ともな の名はなつかしく、しかも名 り、その果実のみごときことり 「巴旦杏（はたんきょう）」と りました。明治四十年には十 前のままのすっぱい甘さが舌 の奥から全身にひろがり、た まらない郷愁をさそわれます。

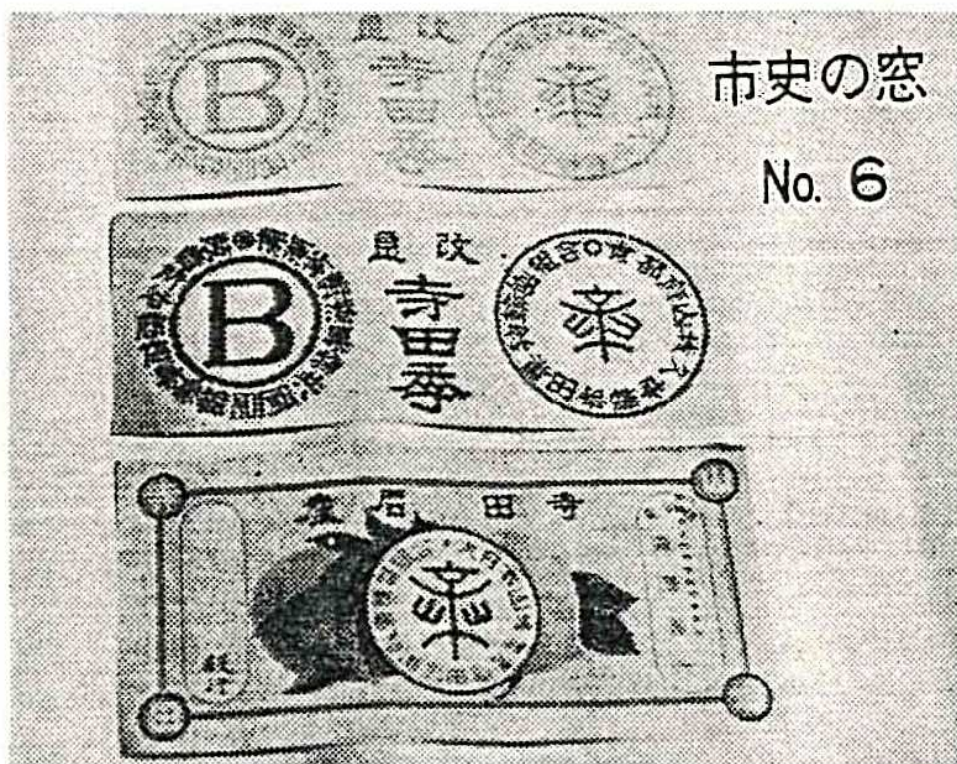
青谷の梅、富野の梨、寺田 の李、久津川は「うど」だが 果物なら柿か。このほとんど が万葉植物として古くから知 られています。

昨年末、寺田の森沢昭夫氏 から、明治四十一年七月十七 日付の大阪朝日新聞を届けて いたいただきました。この新聞か ら寺田李の由来を調べてみま した。

当時六十九歳の森沢善六翁 （おう）は、桃づくりを水度 つかれて、新芽五本をもらい受 名付けられました。

神社西方一帯の畑で営まれて きました。この新芽を桃の木に 販路も京都・大津から大阪・ つき木されたのが村で最初のこ 天満、そして明治十五年後には

## 寺田李（すもも）のはなし〈その1〉



当時、李の出荷に使われたラベル

五万貫余（約六十トン）、三 万三千元（今の物価で約七千 万円）の上り高に及び、両陸 下に献上される頃には、村で は米につぐ特産物となりました。ここで福羽子爵殿の勸告 を受け、農民の決議を経て、 「寺田李」と改称されました。 善六翁三十余年の苦勞と精進 の結実でした。

寺田李を栽培し農村寺田の 重さを支えたのも、もちろん 寺田千軒の農民魂と安田安之 助氏のつき木名技、西村喜市 翁他先覚者篤農家（とくのう か）の協力、精進のたまもの だったのです。（T）